
私と雀

六畳半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と雀

【Nコード】

N8322D

【作者名】

六畳半

【あらすじ】

君はただ、思っている。僕はただ、見つめていた。

（前書き）

この作品は、すでに投稿していた『くだらない話』を続編の執筆にあたって改名したものです。内容、文章ともに『くだらない話』と差異はありません。

薄暗い小さな部屋。窓から差し込む淡い光芒^{こうぼう}がかすかに床に届いている。

「本当にくだらなくて、どうでもいい話なんだけどね」

部屋の中央。白いベッドの上で、上体だけを起こして座っている女が唐突にそう言った。静まり返ったこの部屋には不相応なほどに澄んだ声だった。

「何？言ってみてよ」

ベッドのすぐ横。緑の丸イスに腰掛けた男が、女の発言を促すように言った。

「その窓の向こうに金木犀^{きんもくせい}が有るじゃない？その枝に昨日、雀が一羽止まっていたの」

「へえ、可愛かった？」

「ええ、とても」

女は男のほうを見て、目を細めながら嬉しそうに言った。その破^は顔に思わず表情をほころばせた男が、期待もあらわに尋ねる。

「その雀がどうかしたの？」

尋ねられた女は少し俯いた。そしてもう一度男の方を見て嬉しそうに言った。

「翼が無かったの。両方とも」

女が興奮を隠し切れずに体を揺らした。お腹の辺りまで掛かっていた白の掛け布団がずり落ちて、男が如才^{じょさい}なく元の位置に戻す。その時に、男の伸ばしていた両腕が女のそれとぶつかった。

「あつ、ごめん」

男が慌てて言った。その視線は少女の表情を窺っているようだった。

「気にしないで、どうせ有って無いようなものだもの」

女が視線を落とし、自分の腕を見て言った。その腕は上腕の中ほ

どまで包帯が巻かれていて、力無く布団の上に置かれている。

女の言葉に内心安堵した男は続けて尋ねた。

「それで、雀を見てどうしたの？」

「とても嬉しかったわ。そう、とても」

女はかみ締めるようにゆっくりと言った。

「何故、嬉しかったんだい？」

女はそういわれて少し押し黙った。そして、どこか記憶を懐かしむように天井を仰いだ。

「昨日からずっとそれを考えていたの。なんで嬉しかったんだろうって」

女は上目で男を見ながら答えた。みられた男は気恥ずかしそうに視線を逸らして尋ねる。

「答えは出た？」

「ええ。今日、あなたを見ていて分かったわ」

「教えて欲しいな」

「うん、あのね、私はずっと前からこの両腕が使えないでしょ、そしてその雀も両方の翼が使えない」

「うん」

「そう思ったら私は気兼ねなく雀を信じれるような気がしたの。あなたや、他の私を見た人間は、腕の使えない私に、虫唾むしずが走るような憐憫れんぴんや同情を超越すけど、その雀はそんな事しないわ。私と同じように腕を失ったのだから、私の苦しみや喜びや願いを素直に受け止めてくれる。そう信じれるから、嬉しかったんだわ」

女は言い終わった後、にこやかな表情で男を見つめた。男もそれを見つめ返す。

「そっか」

男が穏やかな声で言った。

「ね？つまらなかつたでしょ」

女が言った。お腹の掛け布団がまたずり落ちた。男はそれを見て、目を閉じて言った。

「ああ、とてもくだらない話だ。そう、とても」
女はなぜか満足そうな顔をした。そして、男はズリ落ちた掛け布
団へ手を伸ばす。

(F i n .)

(後書き)

『続・私と雀』に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322d/>

私と雀

2010年12月19日05時46分発行